

全米オープン前哨戦の錦織

盛田 常夫

全米オープン前哨戦

8月16日に終わったカナダ・ロジャース杯4回戦で錦織はナダルを破り、準決勝に進んだ。ナダル撃破の調子が続けば、ATP1000大会（グランドスラム大会に次ぐ、プロテニストーナメントで、優勝者が1000ポイントを獲得する）で初優勝も夢でなかった。しかし、臀部を痛めマレーに惨敗し、翌週からのATP1000大会を欠場し、月末からの全米オープンに備えることになった。

芝のウィンブルドン大会を終えたトッププロは、8月末から始まる全米オープンに向けて、8月の3つのハードコートの大会を通して徐々にエンジンを全開していく。8月は第1週のCity Open（ATP500、ワシントン）、第2週のCoupe Rogers（ATP1000、モンリオール）、第3週のWestern & Southern Open（ATP1000、シンシナティ）と転戦し、8月31日開幕の全米オープンを迎える。

ジョコヴィッチが第2週のトーナメント、フェデラーが第3週のトーナメントから参戦するように、トッププロは体力の温存と全米オープンへの仕上がりを考えて、出場トーナメントを決める。錦織はウィンブルドンを棄権したこともあり、また得意のハードコート・シーズンの始まりということもあって、ワシントン大会からすべてのトーナメントにエントリーした。

実際問題として、夏のテニスは体力の消耗が激しいから、全米オープンの前哨戦すべてを戦うのは、賢いことではない。ワシントン大会からモンリオール準決勝まで、錦織は2週間で9試合闘い、860ポイントを獲得し、世界ランク4位の位置を強固なものにした。だから、ポイントを稼ぐためにしゃにむにトーナメントに出る必要はない。

マレーに負けて、この2週間の戦績は8勝1敗である。ここらでいったん休みを入れないと、全米オープン前に、完全燃焼してしまうところだった。とくに、今年の全米オープンで準優勝している錦織は、獲得した1200ポイントを防衛しなければならない。決勝戦に進めなくても、簡単に負けて、ポイントを大きく失うことは避けたいところだ。去年も出場していないシンシナティ大会を欠場しても、錦織には失うポイントはない。ここはいったん休養を取り、再度、全米オープンに向けて調整するのが正解である。

ワシントン大会の錦織

ウィンブルドンの棄権以後、最初のトーナメントとなったCiti Open（ワシントン、ATP500）で、錦織選手が見事優勝を飾った。2回戦から登場した錦織だが、なんとなくゲームへの入りがしっくりせず、気分が乗っていないように見えた。それでも、格下に足をすくわれることなく、順当に駒を進めた。格下に負けないのは上位ランクを維持する上でたいへん重要だ。トーナメントの前半で簡単に負けてしまうと、ランクを維持できない。このト

ーナメント優勝時点で、2015年勝利数数が43（負け数9）となり、勝利率は世界4位、勝利数で世界3位である。この数字こそ、格下に負けない強さを表している。

どのスポーツ競技でも、たまに上位の強豪を倒しても、下位の選手に簡単に負けてしまうとランクは上がらない。稀勢の里も同様、上位に強くても、下位に取りこぼしを繰り返しては、頂点に立つことはできない。テニスでも、上位選手の調子が悪く、下位選手が絶好調だと番狂わせが起きることがある。しかし、たまに上位選手を倒しても、コンスタントに成績を残せないと、ランクを上げることができない。錦織はトーナメントの序盤で苦戦することは多いが、それでも簡単に下位の選手に負けない。そこから調子を上げていき、上位との対決で最大限の力を発揮する。まさに勝負師である。

剛球サーヴァーとの連戦

ワシントン大会では4回戦から本格的な闘いが始まり、そこから連続して、準決勝、決勝と3試合連続で、当代を代表するビッグサーヴァーと闘うことになった。同じビッグサーヴァーでも、それぞれの選手には特徴がある。

4回戦の対戦相手はオーストラリアのグロース選手。どう見ても、テニス選手には見えない。ラグビー選手か、プロレスラーのような体格である。193cm、100kgでそれほど大きいようには見えないが、上半身の筋肉の盛り上がりでウェアがはち切れんばかりである。サーヴィスの世界最速記録をもっていて、チャレンジャー大会（いわばプロテニスの下部トーナメント）で記録した263km/hが世界最速記録になっている。もっとも、計測器の設置の仕方のでかなりの誤差がでるから、実際にこの速度だったのか疑問の余地はある。しかし、錦織戦では230km/hを連発していたから、ビッグサーヴァーの一人であることは間違いない。同じくビッグサーヴァーでもカルロヴィッチ（212cm）の動きは非常に緩慢だが、グロースは敏捷なアスリートで、サーヴィスだけでなく、片手のバックハンドも強烈である。カルロヴィッチの場合は、サーヴィスが入らず、セカンド・サーヴからストローク戦になるとすぐにポイントを失ってしまう。これにたいして、グロース選手はサーヴィスだけでなく、力のあるフォアとバックの打球にも対処することが必要になる選手だ。

グロース選手は、トスを低くして力で球を叩く。角度はないが、その分だけスピードが減速されない。体格は違うが、ウクライナのドルゴポロフ選手も同じようなサーヴィスを打つ。プロレス選手が力任せに球を叩くようなものだから、簡単にラケットに触らせてもらえない。

多分、錦織選手がテニスを始めてから今まで、対戦したほとんどの相手は体格的に大きい選手ばかりだろうから、他人が考えるほどには体格差が苦にならないかもしれない。それが錦織選手のレシーブ力を鍛えてきた。錦織選手にはレシーブ力は現在のテニス界で3本の指にはいるだろう。錦織本人も語っているが、剛球サーヴィスを如何に返球するかを楽しんでいるようで、サーヴ・レシーブにテニスの醍醐味を感じている。彼のレシーブ力を支えているのは、球のコースを読む力と眼力である。錦織が判定に対するチャレンジ権（1セット

につき 3 回ビデオ判定を要求できる) を行使した場合、かなり高い確率で彼の判断が正しい。それは彼の視力、眼力がかなり高いことを示している。どんなに速いサーブやストロークでも、彼が判定に異議を唱えたポイントは、多くの場合、錦織に分がある。これは他の選手に見られないことだ。4 回戦から決勝までの各試合で、判定を覆したチャレンジが存在し、それが試合を決定するようなポイントで起こった。この眼力があるからこそ、自分より遙かに大きいパワーヒッターとも互角以上に闘える。

一方、グロース選手は比類のない速いサーブを持ちながら、世界ランキング 50 位前後に位置しているのは、明らかにレシーブ力に問題があるからだ。スピードのない錦織選手のセカンドサーブを何度かひっぱたいてポイントを奪うことはあったが、明らかにサーブ・レシーブに難がある。攻めているときは良いが、受けに回るともろい。腰高で脇が甘い稀勢の里のようなものだ。このディフェンス力の違いは大きい。錦織選手が相手のサーブ力が弱ったところや、セカンド・サーブを確実にポイントして、各セットでグロースのサーブゲームを一度ずつ破り、勝負が決まった。この勝ちパターンこそ、剛球サーヴァーを破る定石である。

余談になるが、ハンガリーでは、往年のテニス選手タローツィ・バラージュ (Taróczy Balázs) が錦織の試合の解説者になることが多い。筆者が最初にハンガリーに留学した 1970 年代の終わりに全盛期を迎えていたタローツィは、ローズウォールを彷彿させる正統派スタイルで、ハンガリーテニス界を牽引していた。タローツィは単純な力のテニスを評価せず、柔よく剛を制す錦織を非常に高く評価している。グロース戦を前に、タローツィは 6-4、6-4 で錦織の勝ちを予想していたが、その通りになった。

タローツィは全仏、ウィンブルドン、年末のマスターズのダブルスで優勝し、ダブルスタイトル 25 個、シングルスタイトル 13 個を誇る名選手で、世界ランキングはシングルスで 12 位 (1982 年)、ダブルスで 3 位 (1985 年) にまで到達した実績をもつ。全日本オープンでも 1981 年にアメリカのテルシャーを破って優勝した。九鬼選手との試合を見に、田園コロシウムに行ったことを覚えている。錦織が二連覇したバルセロナの赤土コートでも、シングルスで優勝した。常々、「この小さな日本人が、もう少し怪我に強く、もう少し威力のあるサーブをもてば、もっと早くに世界のトップ 3 に入っていたはず」と口癖のように語っている。

チリッチ戦

準決勝のチリッチ戦は、昨年の全米オープン決勝の再現となった。昨年の全米オープンでチリッチはテニス人生で最高の状態にあった。やることなすことがすべて決まり、決勝までの 7 試合で 1 セットも失わなかった。グランドスラム大会でセットを落とさず優勝するのは非常に稀なことで、記憶に間違いがなければ、フェデラーが全豪オープンで一度達成したことがある。

昨年の全米オープン準決勝ではフェデラーを 3 セットで簡単に打ち取って決勝に進出したチリッチは、神がかり的な出来だった。これにたいして、チリッチとの対戦で勝ち越している錦織だが、4 回戦から 3 試合ともフルセットを闘った疲れもあって、チリッチに簡単に負けてしまった。錦織はグランドスラム制覇の願ってもないチャンスを逃した。しかし、チリッチはこの後、肩を痛め、トーナメントから長期にわたって離脱してしまった。トーナメントに復帰した今年は、それほどめざましい活躍を見せていない。全米オープン前のチリッチに戻ってしまった。

Citi Open でようやく準決勝にたどり着いたチリッチだが、強さと脆さが交互する不安定な闘い振りだった。ただ、彼も世界ランク 8 位に留まるだけあって、下位に対する取りこぼしなしに錦織との対戦を迎えた。グロースとの対戦を終えた錦織にとって、198cm のチリッチのサーブはそれほど脅威でなかった。もちろん、力のあるサーブを入れてはいたが、肩が本調子でないのか、凄さは感じさせなかった。だから、錦織が第 1 セットを落としても、いずれチリッチのサーブをブレイクするだろうという予感があった。それは錦織自身が感じていただろう。案の定、第 2 セットでは 2 度のブレイク、最終セットも 2 度のブレイクで全米オープンの雪辱を果たした。

チリッチの場合も、サーブ・レシーブで錦織に劣るだけでなく、ストローク戦に持ち込まれた時の分は完全に錦織にあった。最終セットにもつれ込んだとはいえ、錦織がきっちり勝負を決めた試合であった。

イスナー戦

ワシントンの決勝はアメリカ No.1 のイスナーとの対戦になった。イスナーとは今年 4 月 (Miami Open) に初めて対戦し、錦織が完敗している。このときのイスナーは一か八かのパワープレイを仕掛け、やることなすことがすべて決まった。サーブもストロークも、全力で打った打球がことごとく決まるという神がかり的な出来で、錦織との最初の対戦を制した。テニス人生の中で、何をやっても決まるという試合がどの選手にも何回かある。一度だけグランドスラム制覇の頂点に立った選手も何人かいるが、彼らのほとんどはグランドスラム期間限定で、人生最高のコンディションが 2 週間持続したケースである。

この試合では、イスナーが再び力で錦織をねじ伏せるか、それとも錦織が剛球サーブを凌いで、ストローク戦に持ち込めることができるかが最大の見所であった。

イスナーは公称 208cm、108kg とあるが、錦織と並んだ状態で見ると、30cm を超える身長差がある。大人と子供の差以上である。この長身からさらに高く放り上げるトスから打ち込まれるサーブは角度がある。グロースとは全く違う剛球サーブである。さらにキックを効かせたセカンド・サーブは錦織の頭上に達するほど跳ね上がる。しかし、サーブの質は違っても、剛球サーブに対する戦い方の定石は変わらない。自分のサーブゲームをきっちり取って、相手のサーブに隙が出る時を逃さない。

イスナーのサーブ・レシーブはグロースやチリッチ以上に難しいが、ストローク戦になれ

ばチリッチよりもろい。イスナーは力で押して、少ないストローク数で勝負しないとポイントを取れない。体重が 100kg を超えるから、左右に振られると足が付いていかない。ストロークで振り回されるのは最悪のパターンである。だから、錦織陣営の作戦も、イスナーを左右に振って疲れさせることにあった。そうすれば、サーヴィスに隙がでる。その隙が出る数ポイントを確実に取れば、試合が決まる。

しかし、第 1 セットは錦織の最後のサーヴィスゲームがブレイクされ、あっけなくイスナーが取った。1 セットを取った油断だろうか、イスナーにちょっとした気持ちの緩みがでて、第 2 セットの出だしでサーヴィスゲームをブレイクされた。錦織はこのセットをそのまま押し切った。最終セットも、先にブレイクして優位に立ち、後はストローク戦で完全優位に立ち、最後のサーヴィスゲームでも、ストロークで圧倒して簡単に勝負を決めた。

試合後、イスナーは、「そこそこの第一サーヴィスを入れても、錦織はベースラインからのストロークで、ベスト中のベストの選手なんだから、彼との対戦は非常にタフだ」と脱帽している。錦織にレシーブ力がさらに高まれば簡単に格下に負けることはなく、サーブ力ももう少し高まれば、常にトップフォアにランクされる選手になれるだろう。グランドスラムを取れるかどうかは、まだ別の問題である。それにはやはり神がかり的な運が必要だ。

モンテリオール・ナダル戦の意味

錦織はワシントンからモンテリオールに移動して、2 日の休養日を得てから、クープロジヤース大会に参戦した。シード選手は 1 回戦免除なので、2 日の休養ができたが、2 回戦から 4 回線のナダル戦まで、休養日なしの連戦になった。5 セットマッチのグランドスラム大会とは違い、3 セットマッチなので試合時間も短い、それでも夏の連戦は疲れる。

この大会の錦織は、ワシントン大会とは対照的に、ストロークプレーヤーとの対戦が続くことになった。2 回戦はクレイコートを得意とするストロークプレーヤーのアンジュアールに圧勝し、3 回戦は体格的にほぼ錦織と同じで、ストロークで勝負するゴファンと対戦した。ゴファンは調子の波が少ない安定した戦いが特徴で、ランキングも 14 位に位置している。錦織と同タイプの選手だが、やはり錦織がそれぞれのセットで一度ずつサーヴィスをブレイクして、6-4、6-4 できっちり仕事したゲームだった。

迎えた 4 回戦がナダル戦である。今季不調なナダルだが、それでも簡単に勝てる相手ではない。ここまでビッグフォアのなかで、一度も勝っていない相手がナダルである。ただ、昨年来、立場は逆転している。昨年のマドリード・オープン決勝では故障棄権するまで、互角以上に戦い、もう少しで ATP1000 のタイトルと、対ナダル戦初勝利になるところだった。しかし、最終セットの途中で棄権せざるを得なかった。ナダルにはこの時の錦織の攻めが、強い記憶として残っている。

昨年のマドリード・オープン決勝では、錦織がライジングを打つ速い展開を仕掛けた。クレイコートではあまり効果のない戦法だが、この錦織の攻めがもう数ゲームで頂点に立つところまでクレイの王者ナダルを追い詰めた。優勝インタビューでも、ナダルは「今日の真

の勝利者は錦織だ」と言わざるを得なかった。

この対戦以後、ナダルは故障を繰り返したので、対戦がなかった。それがモンテリオールの準々決勝で実現した。事前の接戦予想に反し、試合は錦織の圧勝だった。錦織は高い打点から左右に強いストロークを展開し、かつサーブもレシーブも完全にナダルを上回った。ナダルはほとんど不敗を誇るクレイコート、しかもホームのマドリッド・オープンでの苦戦の記憶から解放されていなかった。先にサーブをブレイクされたナダルは、「今の自分にはハンディを押し返して、錦織を倒す力はない」と直感的に感じただろう。

この高い打点から速い展開を図るのは、フェデラーがもっとも得意とするところだ。錦織がハードコートで勝率が高いのも、ボールがイレギュラーしないので、思い切ってライジングを叩けるからだ。いつもそれが成功するとは限らないが、この展開が嵌ると、フェデラーでもジョコヴィッチでも破ることができる。昨年11月のATP最終戦でトップランカー8名によるツアー・ファイナルで、初めてマリーに勝利したゲームがそうだった。球速が速いコートで、ライジングショットを次々に左右に打たれると、相手は為す術がない。同じ戦法で迎えたジョコヴィッチ戦では、この戦い方を最後まで持続できなかった。それでも、錦織が室内の速いコートで強いことを知らしめた最終戦だった。

錦織が現在の世界ランク4位からさらに頂上を目指す課題ははっきりしている。連戦に耐える体力をつけること、サーブの威力をもう一段高めること、そしてトップ選手との戦いで、ライジングの速い展開を安定して繰り返せることにある。これがクリアできれば、世界の頂上に立つ日は近い。